

講演

「人をつくる・地域をつくる」

～東京都自立支援協議会5年間の取り組みを踏まえて～

沖倉智美（東京都自立支援協議会会長 大正大学人間学部社会福祉学科教授）

（沖倉） 皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました都の自立支援協議会の会長をさせていただいております沖倉と申します。私も座って失礼をいたします。

私は、平成24年から来年の3月までの任期で、2期、実質5年間をこの協議会の会長として務めさせていただきました。この間、こういうセミナーの席でも、最初のご挨拶とか、最後のシンポジウムの進行をさせていただくということに終始しまして、私がこういう場に出て講演をするというのは控えようというふうにずっと思っていました。

というのは、「会長」ってなんか、「長」とつくって偉そうなのですが、都協議会で活動されている方や、地域協議会で委員として一緒に活動してくださっている方がこういう場所に出てお話しいただくのだろうと思っていましたので、控えてまいりましたが、先ほど和田さんからもおっしゃっていただきましたように、この5年間一緒に皆さんとやってきた中で、今日は会長の立場としてもそうですけども、私が一研究者、実践者としてこの5年間、何ができて、何ができなかったかというのをちゃんとお話しした上で任期を全うするのが筋だろうと思っていましたので、今回こういう場をいただきました。

先ほど皆さん事例報告をなさったのが約25分ですね。私はその倍頂戴しているのですが、なかなか5年を1時間でしゃべるとするのは苦しいものでして、ここ1カ月ぐらいずっと何を話ししようかと考えていたのですが、まとまらないままここに座っています。

それで、私のほうはパワーポイントというのがあまり好きではありませんで、お作りしていません。皆さんがお持ちの青い資料の39ページからのところに柱だけ書かせていただいたのと、あと最後に、先ほど和田さんのほうでご紹介いただきました図が二つ並んでいまして、それを使ってお話を申し上げようと思っています。

これからお話ししようと思っているのは、実は皆さんに事例の紹介、実践例の紹介をしていただくことがこの5年間非常に多くて、それは私が心

に決めたことです。きょうも、多摩地域、いわゆる市部と、区部と、それぞれ出ていただいて、できるだけ多く、かぶらずに、5年間一つでも多い自治体の協議会で活動していらっしゃる方や専門職の方に、この舞台に上がっていただくということを心がけてきました。

そのときにいつも思うのですけれども、きょうの皆さんは時間もご協力いただきましたし、非常に主張が通ってストーリーがわかりやすかったというふうに私は思っています。ただ、皆さんに実践例を話してくださいと言うと、「私たちやります、頑張ってます」って。「いやいや、いいんです。」良いことをやっているから舞台に上がってもらうのは間違いないのですが、時々、ご自分たちの実践を、会長としてというよりも、私個人として話しているというふうに思っていたのですが、時々お酔いになって、気持ちよく酔っ払ってお話しなさるので、ここに来られている方というのは、その実践がどうやっていろんな苦労を重ねて、壁を乗り越えてでき上がったかということを知りたいわけで、ですから、そのあたりを丁寧に話すということが重要だというふうに思っています。

皆さんの前でお話をする機会を今までつくらずに5年間来たので、一体都の協議会は何をやっているのだろうというふうにお思いになっている方もたくさんおられたと思いますので、遅ればせながら、できたこと、できなかったこと、できなかったのはなぜか、そしてぜひ次期の協議会の皆さんにはこういうことをお願いしたいというのを、通称「遺言」と呼んでいるのですが、それをさせていただきますと思っています。

まず、先ほど39ページをというふうにお問い合わせをしましたが、その活動の実際についてご紹介をします。テーマを先に書きましたが、私たちの都の協議会が5年間ずっと取り組んでいたのは何かというと、4本柱というのでしておりました。

一つ目のところに「本会議」というのがありますが、これが今日の肝になります。後ほどご説明しますので、飛ばします。

今日は、3番目の自立支援協議会セミナーです。これは毎年1回、障害者週間の前後の日をとってさせていただいております。性質からいうと情報提供型というふうに言わせていただいております。どういう意味かということ、残念ですが、これだけ多くの方にお見えいただくので、皆さんから質問ですとかご意見を伺うことはなかなか難しい。で

すから、こちらから、ある意味一方通行ですが、お話をさせていただいて、情報やヒントをお持ち帰りいただくという会にしています。

それに対して、一つ上に戻りますけれども、②の自立支援協議会交流会というのもやっておりません。これは、年によっては1回やったり2回やったりということで、後ろに書いてありますように、情報提供型に対して収集型というふうにしています。口火を切るためにも実践報告などはさせていただいておりますが、この交流会の時間の多くは、ご出席いただいた各地域の自立支援協議会の皆さん、あるいは相談支援事業の皆さんにたくさんお話しいただくと。テーマ設定をしてたくさんお話しいただいてという方式をとっています。

4番目なのですが、今日は別にお配りしなかったのですが、ご覧いただいているでしょうか。これが最新版の27年度の「地域自立支援協議会の動向」。通称「動向集」と呼んでいます。これを大体1年に1回発行してきました。

これについて少しだけ言っておくと、最初はどうしてもまだまだ始めたばかりという協議会などもあったものですから、どんな人がどんな部会をつくってやっているという事実、データだけを掲載するもっと薄いものでした。それがだんだん年数を重ねていって、今、ほぼ各自治体で地域の協議会ができましたので、今度は次に具体的に活動をどのように行い、その中で何が課題となっていて、それを解決するために取り組んでいるかということをも具体的に記述していただくということで、各地域協議会の事務局のほうにアンケートをお送りして、その結果をこの冊子にまとめました。

ですから、実は冊子はずっと出しているのです。だけど、見たことがないとか、聞いたことがないという人が余りに多いので、これは今はやりのネット上に上げるしかないと思ひまして、今年度の27年度版からホームページ上でも見られるようにしました。

ただ、たくさん広めようと思えば思うほど書きたくないことは書かないということが起こるわけですね。昔はもっとすごかったですよ。最初やったときは、無回答、非回答。でも、それって、ひっくり返してみると、非協力的、あるいはやっていない、そういうことの裏返しなので、逆に「答えていただいたほうがきれいじゃないですか」と私などは思ってしまう。今はそういうところはほとんどなくて、大変丁寧に記述をしてくださるのですが、ホームページで流しますと言うと、

そこに曇りが生じるので、ですから、冊子の部分に細々したことを書き、大体の概要をホームページ上でご紹介しているというスタイルをとっています。

今4本柱の三つまで説明したのですが、最初に書いた割には最後に持ってきたのですが、皆さんのところでも本会議というか、会議をなさっていると思うのですが、先ほど、櫻井さんが年に1回、2回、行政の人が真面目だから必ずやるが、でも、それ以上増えもしない、減りもしない。それです。

さっき最初に言ったと思うのですが、私はもともと大変毒舌なものですから。だけど、最後の遺言なので、ちゃんと言うことは言うてこう思ったのです。本会議は最初の年は1回だったかな。それを2回にしたり、あるいは3回にしたり、これは駆け引きです。本会議を行うに当たって諸般いろいろな会議費がかかるとすると、トータルの金額が変わらないとすると、どこにどう大事に充てていくかという話になるので、毎年事務局と話し合いをして、中でつくり上げていくものと、皆さんと出会って情報を得たり、情報を提供したりという部分と、どのバランスでやるかというのを非常に悩みました。

具体的に何をしてきたかということはこの後、ご説明をするのですが、ちょっと順番が悪くて申しわけないのですが、本会議でテーマを設定しました。私の39ページの資料の2の(1)「テーマ設定」です。

私、3期5年と書いたのですが、4年半じゃないかと言われるかもしれませんが、最初の本会議を開いたのは9月ですが、私は4月から就任して打ち合わせを重ねておりましたので、私の中では5年間取り組んだというふうに思っています。

24年の9月に最初の本会議を開きまして、いろいろ準備期間も含めて少し丁寧にやろうということで、24年の9月から27年の3月までを第3期として私のほうで就任をいたしました。そこで掲げたテーマが「障害のある人のライフステージにおける課題と相談支援のあり方」ということで、先ほど和田さんにご紹介いただきましたが、後ろから二つ目の横組みです。ここをちょっと説明したいので、開いていただいてもいいですか。

私が就任させていただくにあたって、本会議の括弧のところにも書きましたけれども、よく審議会方式とあって、口の字型にして、議長がいて、みんな名札がついてというのが私はとても嫌いで、

そういう席にももちろん呼んでいただくのですが、あまり楽しいものではなくて、さすがに東大和のように膝突き合わせてまではいかなかったのですが、それに限りなく近い方法をとりたいと。

委員は、私も含めて18から20の間で推移していましたので、その人数から考えると、その人たちが一堂に会して物を言うとなると、協議会を開くと、一言、自己紹介と最近の出来事を話して終わってしまうので、議論ができないと思ったのです。

それで、私が会長にさせていただく条件として、分科会の形式をとってもらいたいと、本会議の全体会として前後はあるが、その中のメインの部分は大きく二つのグループに分かれて、10に満たない人数で、テーマを設定してじっくり話し合いをしたいと、ただ単に話し合っても困るので、話し合った結果を放り込む箱、枠はつくっておいたほうが良いということで、実はこの図1というのは、枠は私がとりました。

ここの中に書かれていることというのは、委員の皆さん、それと先ほどお話ししました情報収集型の交流会で出た意見、それと提供型のときに、このトピックやテーマに合った方にここにご登壇いただいてお話をさせていただいたもの、全部入っています。なので、都の協議会がつくったものというふうにあまり思っていないで、たたき台をつくったのはもちろん私たちですけれども、これをいろんなところにお出しして、「ここは違うんじゃないか」とか、「ここはもう少し入ったほうがいいんじゃないか」というのを本当に多くの方からご意見をいただいて、感謝をしております。その結果がこの図1になります。

この図1は何をしたかったかという、一番上の罫がライフステージ。ライフステージというのが上の軸になっています。ライフステージをゼロ歳から亡くなるまでの一生と考えたときに、乳幼児期、学齢期、青年・壮年期、高齢期というふうに分けて、その間、障害のある人たちがそのライフステージにおいて生活をしていく中で、どんな課題があったり、それを解決するために相談支援で何ができるか、これをテーマに話し合っていました。

細々したところは見えていただくしかないので、その中で最もみんなが「そうだよね。なるほどね」と言って、既に1年半が終わった時点で気づいていたことがあります。それは、ライフステージの横軸のところに、各期の間二重の変な

矢印みたいなのができていますね。例えば乳幼児期と学齢期の間だと「保健・保育・療育⇔教育」。このついている両矢印が重要なのだろうということに気づいたのです。これは私の言葉ですけど、これを「移行期」というふうに呼んでいます。

Aという時期から次のBという時期に行くときに、ここは乳幼児期で例を挙げれば、恐らく乳幼児期で中心になった支援者がそのまま学齢期に行けないことのほうが多いので、この間の矢印のところで、両方の支援者が協働してしっかりバトンを渡していかないと、お一人の人の支援をするのに、年齢が変わるととても大きな溝ができるだろうということを発見というか、当たり前のことなのです。だけど、こうやって見てみると、そうだなとみんなで思ったと、確認をしたということですよ。何も全然新しいことを大発見しましたと言っているのではなくて、それを紙の上で見えるようにしてみようというのがこの第3期の取組みでした。

私、古い流行語とか大好きなので、6歳のところにある矢印をアラウンドシックス。アラフォーとか言うじゃないですか。6歳前後というので、アラシックス、アラ6問題と呼んでいるのですが、ここは大体乳幼児期から学校へ上がるときの課題が出てくるだろうと。

それと、18歳で、残念ですけど、多くの障害のある人は学校教育を終えます。そうすると、成人になるまでの18から20歳というのは、いろいろサービスの滞りがあったり、詰まりがあったりということで、これ、アラウンドエイティーン。格好悪いですね、エイティーンとか。でも、そういうふうに言っています。

それと大体40歳前後。これこそまさしくアラフォーですけど、これもまた残念なことですけども、事実であって、障害のある当事者の親御さんが高齢期を迎え、私あまり好きな言葉じゃないですけど、親亡き後をどうするかということが浮上してくる時期になるかと思えます。ですから、「成年後見」とか「権利擁護」と書きました。

それと、今恐らく最も問題になっていて、30年度に障害者総合支援法の見直しの後の改正を迎えますけど、そこでも議論になっている、いわゆる障害というサービスを受けている人が介護保険に移る。移ると言ったら、この間また怒られたのです。移るではなくて、「介護保険が優先利用になる高齢期」。

ですから、ここはアラウンド65ですね。ここ

はサービスも変わるし、法体系も変わる中で、障害のサービスを使って暮らしてきた人が、残念ですけれど、介護を受けることになったときに、サービスは減るけど値段は上がるみたいな、そういうことが起こるわけです。このことをどうするか。

そのようなことも含めて、移行期というのが大事なのだということを皆で確認することができました。

それと、いろいろなことがわかったのですが、それはまたいろいろなところでご報告をしておりますので見ていただくのと、最終報告を出しますので、それは見ていただこうと思っています。

ただ、もう一つだけつけ加えておくと、先ほど、和田さんが最後に、地域の中で障害のある人、当事者の方の、これはそういう言い方で、私はそういうふうを受けとめたのですが、当事者の存在にスポットを当てて、地域で暮らしを支える人を増やしていく。ですから、車椅子で爆走する人を関係者は知っているけど、地域の「福祉なんて知らないわ」と言っている人も、「ああ、あの人が知っている」と。あの人が暮らしやすくするためにはどうすると、そっちの発想と云えばいいのですか。

入り方が、おもしろい人が地域で暮らしていて、その人は何か不自由があって、何か手伝いできるのだったらやろうかとなる。当事者の存在にスポットを当てて支える人を増やしていくという話がありましたけど、それを考えたときに絶対忘れてはならないのは、障害者、障害のある人のためだけのサービスというのをたくさんつくことにこれまで専念してきたのだと思うのですね。その役割は終わったとは思っていませんが、ただ、そればかりを追っていると、恐らく、今お金がない中で、なかなか障害のある人だけのところにお金が降ってくるわけがないので、そう考えたときに、障害者の権利条約、あるいは差別解消法などできましたけども、どれだけ障害のある人が、一般の政策や施策の中でそのサービスや制度を利用して暮らせるかということが恐らく重要になってくるのだと思っています。

そのことをつくるためには、何だ、こういう人たちもこのエリアで暮らしているのだと。この人の困りぐあいって自分たちも困るかもなという共感というのですか、そのあたりをどういうふうにつくっていくかということなので、和田さんの事例をお伺いしてそれを思いました。そのあたりのことは図1の中でもわかったところです。いっぱい言いたいことはありますが、こんなとこ

ろですかね。

これは自画自賛というもので、うまくいったなと思っているのです。良かった、良かったと。ところが、図2はなるべくちっちゃい字で入れたかった。というのは、日付が入っています。ちゃんと見てください、これは、28年の5月1日現在の自立支援協議会で作ったものであると。これ、完結編じゃない。図1のほうは、ある程度完結した。でも、これからバージョンアップされないといけないなと思っています。

図2は何をしたかという、今言いますから、戻ってもらわなくてもいいのですが、第4期は、平成27年の4月から来年の3月までを任期として取り組んでいます。ここでやろうと思ったのは、課題や相談支援は何をするのだということがわかったが、それに取り組む専門員を中心とした従事者というのはどういう人なのだろう、どういう人かわかったら、その人をどう支えていったり、あるいは育てていったら良いのかということを考えてようということ、それが第4期の課題になりました。

第4期は何をしたかという、2年あったのですが、1年目にこの図2をつくったのです。本当はこれを最後までやりたかったのですが、なかなか、万策まではいかないけれども、ちょっと尽きたところがあって、これは一回凍結しようと思ってやめたのですが、これは何かという、図2を見ていただくと、これもまた縦軸と横軸があって、実はさっきの図1は、私もかなり確信を持ってあの枠をつくって、みんなにも合意してもらって取り組んだのですが、図2のほうは、やってみながら考えたというか、走りながら考えたので、二転三転をするのですね、私自身も。なので、皆さんも一緒に二転三転して、さっき和田さんが、図1をつくるときにどこへ行くのだろうと。図1はまだ良かったかなと。そうじゃないですかね、和田さん。1はまあまあかなと思ったのですが、2は、私もちょっと全くもってわからないという感じでした。これは私の反省点でもあります。

ただ、ご説明だけしておく、これは何を示したかという、「ケアマネジメント」と書きましたが、手っ取り早く言うと計画相談です。計画相談支援を行うときに、専門員だけではなくて、サビ管や行政の職員、当事者も含め、みんなでその相談支援にかかわる人たちに求められる視点であるとか具体的な行動というのを出してみませんかとお願ひしたのです。

そのときに、ケアマネジメント、計画相談ですので、入口からある程度の出口があるので、それを上の軸にしました。インテーク、最初に出会うところですね。その後アセスメントをして、ケアプランをつくったり、あるいは支給決定をしたり、その後サービスを行い、モニタリングをし、これがぐるぐる循環するわけですね。これは基本的なことなので、良いと思うのですが、その中に、それぞれの時期、相談支援専門員は、サビ管は、行政は。

そして当事者の人にはこんな問いかけをしたのです。当事者の人に、相談支援に求められると言っても、なかなかなので、当事者の方にはどういふお願いをしたかという、今まで生活をしてきた中で、支援してくれた人で、すてきな支援者、やってもらってうれしかったこと、それに対してもう二度と会いたくない支援者、あるいは、これはされたらつらかった、そういうことを紹介してくださいというふうにお願いしました。それを上手に変換をしながらここに入れていきました。

これ、何が難しかったかという、実は視点というのは出たのです。当事者をエンパワーメントする人とか、連携を地域でうまくできる人みたいなことは出たのです。これは去年もここで言ったのかな、同じことを言って笑われたのですが、連携ってどうやったら連携っていうのですか。先ほど、アフターファイブというか、会議の後の飲み会なのですがと齋藤さんが言ってくれたけど、飲み会をすると連携なのか。なかなか私、論文には書けませんね。連携はどうやってやるか、飲み会、ちょっと厳しいですけど、連携ってどうすることなのだと。

学生にもよく言うのですが、何回どんな電話をしたら連携できたというのか、あるいは信頼関係とか、当事者との信頼関係って、皆さん好きですよ、使うの。私あまり好きじゃないですよ。何だか中身がわからないから。当事者と信頼関係ができたというのは、何をもって。信頼関係というあまり見えにくいものが、どういうことをすると深まっていくのか、それを具体的に挙げてもらおうと思ったのですが、失敗しました。

去年の交流会などは、苦肉の策で何をしたらという、エンパワーメント、ストレングス、ネットワーク禁止令というのをを出しまして、それを横文字ではなく縦文字でしゃべってくださいと。わかりますか。だって、みんなわかった気になっているじゃないですか。エンパワーメントとか、ス

トレングスとか、ネットワークとか。だけど、それを日本語でわかりやすく説明してくださいと言って、説明できる人がどれだけいるか。それは私も含めてです。

でも、それをしない限り、例えば先ほど和田さんかな、新人の人が怒って帰ってきた。新人の人に、「そうじゃないだよ、こういうときはこうしたらいいよ」というのを、「当事者のストレングスが大事だからね」と言っても伝わらないわけですよ。何か私たちわかった気になっているけど、人に自分のしている仕事や、あるいは利用者の力というのをちゃんと伝えていくときに、横文字を使っていると厳しいですよ。縦文字でも、いろんなことを言う人がいるから難しいのだけど。

なので、それをしてもらおうと思ったのですが、残念ながらちょっと自爆しました。私だけじゃないけど、協議会全体でちょっとどんよりしました。でも、途中経過としてこれはお示ししたい。

ただ、そのときに幾つかわかったことがあって、それは重要だと思うので、お伝えしたいのです。どういうことかという、この図2のプロセスの左枠に「支援等の前提となるしくみ、環境、資質等」というところに「エンパワーメント」と「連携」というのが載っていますよね。禁止令を出したのですが、これくらいしか出なかったのです。これは何かという、どのプロセスのどの場面においても、この二つが意識しないとやっていけない。それは、図1のところにも「連携」という言葉がちりばめられているのですよ。それを、具体的にどんな人とどんな連携が必要かというのは、意外に図1のほうに出ているのです。図2には落とし込めなかったのですが、だから、見ておいていただくといいのですが、だからここはプロセスではなくて、いつも私たちが当事者と向き合うときに忘れてはならないこととして縦軸に置きました。

それと、後ほど時間があれば申し上げようと思うのですが、相談支援専門員の人を中心に申し上げますが、相談支援って、ある当事者一人のことを支えるということと同時に、その人が過ごしやすいように地域をつくるということが今日のタイトルです。人と地域をつくるのですが、地域をつくる時に基盤になるものがあるだろう。それは恐らくプロセス全部に関わる。

ケアマネジメントって、プロセスでいろいろ語っていくと、こぼれるものがあるのです。そのこぼれるものの最たるものが自立支援協議会だった

り、あるいは基幹相談支援センターだったり、地域をつくる資源をどのようにプロセスの中で育てていくかというのが落ちてしまうのですね。

これは私は問題だと思っていて、それを何とか入れたいなと思って今も苦心しているのですが、やっぱり一人の利用者を見ながら地域が変わっていくということが見えていかないと、実感が伴わないですね。地域ができてくると、きっと個の利用者の生活の支援って、あえて言いますが、一人一人の従事者の人たちが楽になると思うのですね。

さっきどなただったか、自分で解決し切れない課題については地域へ投げかけていって、一緒に考えてもらおうと。そのときに、ぜひ当事者と一緒に話してもらいたいですよね、投げかける専門員だったり、従事者は。和田さんだったかな、そういうことをおっしゃっていただきましたけど、そのあたりのことを踏まえて、プロセスの下に、下支えになるものとして「地域をつくる」と入れました。だから、一応一生懸命考えたのですが、もう、ここが精いっぱいでした。

さっき和田さんに結論めいたことを先に言っていただいてよかったと思うのですが、これ私何度も言っているのですが、なかなか伝わらなくて、これ都の協議会なんかでやることではないと思っているのですよ。

というのは、先ほど、これまた和田さんだったかな、世田谷ってすごい人口が多くてと言われたけど、東京都は人口多いでしょう。で、各協議会でやっぱりこういう作業をしてもらいたいと思うのです。してもらったものを持ってきてもらって、最終的に整理して都の全体の課題として挙げていくのが、私たち都の協議会の役割だと思っているのです。

だけど、そのときに、例えば図2はなかなかうまくいかなかったので、図1のほうにすると、図1をつくるときにいろんな皆さんのご意見も中には入っている人もいるかもしれないです。今回初めて来ましたという人もいるかしれませんが、聞かせていただいたものをここに入れているのですね。だから、その作業を各協議会でやったら、もっといろんなものが出てくるだろうし、そのまま地域診断と専門的には言うのですが、その地域でどんな社会資源があり、どんな課題を抱えた人がいるかというのを、各地域でしっかり見ていただくためには、こういう作業は必要なのだと思うのです。

そう言いながら、もう時間がなくなっているんで、最後に言おうと思っていたのですが、一つ申し上げておくと、高沢さんがさっき面倒くさいと言ったじゃないですか。でも、面倒くさいですよ。私も言ってしまいますけど。だけど、面倒くさいですけど、あえて言えば急がば回れで、多分それをすることが、当事者の課題を解決したり地域をつくっていくときの最も近道だと思うのですよ。

私はさすがに面倒くさいとは論文に書けないので、「一見すると煩雑だ」というふうに書いたのですが、同じことですよ。細々面倒くさいなど。だけど、その煩雑なことを乗り越えて、その結果じゃなくて。自己弁護みたいだけど、図2は、大したことない。大したことないのだけど、やっているプロセスの中で学んだことというのは、苦しかったけど絶対あると思っているのですね。私も含めて。なので、後ろに「人をつくる・地域をつくる」と書いてあるけど、それは多分、煩雑で、高沢さん流で言うと面倒くさくて、時間のかかるこの取り組みをしている、結果の出るまでのこの取り組みがすごく重要なのだろうというふうに思っています。

これまた順番がいろんなところへ行っているのですが、あと半分しか時間がないので。都の協議会の中で心がけたこととして、一つは、先ほど言った分科会形式にしたということですが、それと関連して、和田さんにもお話しいただきましたし、高沢さんにもお話しいただいたのですが、当事者委員を中心に話し合いが展開されました。それも審議会方式をとらなかつたからできたことだと思っています。

皆さんの地域の自立支援協議会には当事者委員が参画されていますか。高沢副会長のエリアは、当事者部会を立ち上げている。そういった取り組みもされていますか。形だけ参加していただいても仕方がないのです。あえて言います。いないよりましですけど、だけど、形だけそこに存在してもらうことほど罪なことはないとは思っています。ですから、これも私の都の協議会に入れていただく条件の一つで、当事者委員を大事にしていたきたいと。

そのためには、私も努力をしましたが、事務局の職員の方に感謝をしているのは、必ず本会議あるいはこういう会合の前に、事前に資料をご本人のところにお届けして、こんな話し合いが展開されるということをちゃんと説明してもらって、

中には知的の方などの場合、こういったテーマになったらあなたはどんなことを話したいかという当日向けのメモを支援者と一緒につくってもらいました。さっきの話です、これは本当に面倒くさいし、時間がかかるし、煩雑だけど、それを持ってきた当事者の生き生きとした発言というのは、私はやっぱり得がたいものだと思っています。

だから、座ってもらえばいい、出てもらえばいいわけではなくて、そこには準備と当日の配慮と、一番大事だなと思ったのは、委員の皆様が本当に丁寧にその人の発言をじっくり聞いてくれることです。これは本当に二つに分けて、10人に満たない人の中で、その人が発言してくれたことに関して質疑応答がなされるのが本来の協議会の姿だと思うので、私は本当にいいものを見せていただいたなというふうに思っています。これは感謝していることです。

図2に戻りますと、謎の図なのだけど、ここで何がわかったか。これは皆さんにもお伝えしておきたいので申し上げておきたいですけど、これ隠しちゃっているのね、あまり格好悪かったから。本当はそのまま出したかったのだけどね。

どういうことかという、上のケアマネジメントのプロセスで、インテークから始まってモニタリングまでありますね。全体の傾向からいって、このプロセスの中で肝になるのは、アセスメントとモニタリングだという結果は出たのです、みんなの話し合いの中で。にもかかわらず、アセスメントはともかく、いっぱい書いてあるよね。何が問題だったかという、モニタリングのところ、何回も何回も聞いても何も出なかったのですよ。モニタリングのとき何を大事にし、何をやっていますかと聞いたのです。だけど出てこなかった。

モニタリングだけの部会というか、ちっちゃい時間をつくって話してもらったりして、やっとここまで出てきたのですけど、次に気になったのは、ごっちゃにはなっているのですけど、モニタリングというところには、特に上のほうに相談支援専門員から出たものを書いてあるのですね。実は相談支援専門員は、サービス実施のときには何もしていないという結果が出たのです。何回聞いても何もしていないと。

あえて申し上げます。専門員の方は、ケアプランをつくったら「一丁上がり。モニタリングが来るまでよろしくね」って、これで良いのですかと申し上げたい。それが見えてしまった。相談支援専門員の方に、実施のとき「何かしてますか」と

言っても出てこない。ということは、そういうことですよ。一丁上がり。そりゃそうでしたよ。あの計画相談の嵐。私たちも、第3期はそれに飲み込まれないようにしながら、図1を完成させたのです。だから、みんな計画相談の文句を言いたいわけ。だけど、ちょっと我慢と言いながら図1は生まれたのです。その意味でも、私は図1は大事だと思っているのですね。だから、サービス実施のところ、相談支援専門員は何もしていない、しなくてもいい、する暇がない、よくわかりませんが、このことがわかった。

もう一つは、モニタリングって何をすることなのだろうというふうに皆さんがお考えになっているかなのですよ。よくモニタリングはアセスメントだと言われるのですが、これは正解ではないですね。モニタリングって、制度政策上一定の期間に1回やることになっていきますけど、モニタリングをいかにちゃんと効果的に時間をとらずにやるかと考えた場合、日々モニタリングしているはずなのです、本当は。だから、サービス実施のところには、特に専門員やサビ管の人はそれが書かれないといけないはずなのです。だけど真っ白。「何もやっていません。」「時間が来た」と言ってモニタリングをいきなり始める。

だって、これから大変ですよ。計画相談は落ちついたかどうか知りませんが、そうやってきましたけど、モニタリングは永遠に続くのですからね。そう考えたら、効率よくというのは賢くという意味ではないです。きちんと実をとるために日々やっていて、その期間が来たら、その段階はどうだったかというものです。

あともうひとつ言わせていただくと、専門員が忙しい。専門員が忙しいのは、サビ管の人に信頼されていないからですね。というのは、自分だけが御用聞きのように情報をとりにいくだけではなくて、情報が集まる専門員になるということは重要だと思いませんか。

私の立場をお話ししないで話し始めたので、知ってくださっていない方にとっては、なんてことをこの人は言っているのだと思われるかもしれないので、ひとつだけ申し上げておくと、私、後見人をしているのです。本業は大学の教員をしていますから、とても時間がないのです。それで、もちろん、私がやらねばならぬことは必ず私がやりますが、どれだけ後見人としての私のところに必要な情報を皆さんが届けてくださるかということにかかっていると思っています。

これは授業中、学生にも言うのです。「本当は、今日ケース会議で行かなきゃいけないんだけど、授業あるからね」とか言って、「どうすんの」と言うから、「でも、ちゃんと教えてくれるのよ。打ち合わせもするし、ご本人と打ち合わせするから全然平気」って。本来後見人はその場にいるべきです。けども、この仕事をし、このことをもってしても選んでもらえた人がいるので、私はその人の支援をし続けようと思っているのですが、そのときに自分がそこに存在できないのであれば、情報が集まってくる、そういう環境をどれだけつくれるかだと思って、その努力だけは忘れないようにしようと思っているのです。

なので、モニタリング大変だとか、何をしたらいいかわからないとよく私お問い合わせを受けるのですが、日々の実践と情報共有がモニタリングになるのだというふうに思っています。そんなことがわかったということです。でも、大変でした。

3番のところの得られた成果は、私たちが言う話じゃないのですよ。皆さんがどうお感じになったか、当事者がどうお感じになったかなので、これは二つだけお伝えしておきたいと思うのです。

レジュメに戻っていただいて、39ページ、40ページあたりですけど、(1)のところ、地域の実態把握による全都的な課題の抽出はできたのかと考えたのです。やれたかどうか。そのときに、私よく申し上げるし、協議会の皆さんにもこんなことなんじゃないとお話をするのですが、ここで申し上げておきたい。

相談支援って何なのだと行ったときに、皆さん、これ図を持ってくるとわかるのですが、ないので、座標軸の真ん中に自分の身を置いてください。座標軸の中央、交差するところ。そうしたときに、一步を踏み出すというのは未来に行くということですよね。座標軸ですから、自分の前、後ろがあるでしょう。過去を振り返る。この縦。それと横。縦と横があるわけですよ。そこの真ん中に立ってくださいと今申し上げているのです。そうしたときに、縦は今言ったように時間軸ですね。横は広がり当たるのですが、それをちょっと格好よく言ったのが、39ページの3の(1)というところですよ。

どういうことかという、縦軸、時間軸は、先見性と格好いいこと言うのですが、今後を見通す力ですね。過去を踏まえて、現時点から将来を見通す、この力が多分必要だろう。自分は真ん中

に今立ってです。だって、自分の目の前にいる利用者って、昔からつき合っていたら別ですけど、新しい人のマネジメントを始めるときにはこしかわからないですよ。けど、その人には絶対後ろがあるし、ましてやここで計画が終わるわけではなく、将来があるわけですね。だから、皆さん自分をこの真ん中に置いてください。それと、それにとって大事なのはさっき言った移行期です。移行期におけるつながる支援。縦にマネジメントしていく。自分が請け負う部分だけを考えればいいわけではない。

実はこれもちよとずれた話かもしれませんが、この間おもしろい研修をさせていただいた。とある自治体でご依頼があって、さっきの高齢期への移行期の話です。どういうことかという、相談支援専門員と介護支援専門員の「がちんこ研修」と私は呼んでいるのですが、半分半分、同じ数で同じ地域の人たちに集まっていたら何をしたらかという、相談支援専門員は介護支援専門員に何をわかってもらいたい、何を伝えたいか、そして逆に、介護支援専門員は相談支援専門員に何を伝えてもらいたい、これにどれだけ差があったりずれがあったりするかわからなかった、それをディスカッションしてもらったのです。

おもしろかったです。これを言うと、みんな今日ここで合宿するみたいに時間が掛かるので、エッセンスですけど、傾向としてわかったのは、相談支援専門員が「ボキャ貧」、ご自分の目の前にいる利用者のことを説明ができない。それは書けないということでもあるわけですよ。書類でやりとりすることが圧倒的に多いから。

これ、どうやったかという、一応架空の事例があるのです。インシデントといいますけど、例えば重度訪問介護を使っている人とか、高齢期になると重度訪問介護がなくなる。それをどういうふうにつないでいって、違うサービス、あるいは使い続けられるように調整するかとか、そういう話。それを四つぐらいやって、そういうときにはどういうことを聞きたいかというのをやりとりのことです。

介護支援専門員は、それに対していろんな質問をするわけですよ。そうすると、その説明ができない。なので、介護支援専門員がアセスメントし直してみたいな話。本当は同じ人で、ある日突然65になったから違う人がやってきて、「私、支援します」というのは本当はおかしな話で、アセスメ

ントは引き継がれなければ多分いけないのだけど、制度が違ったり、はたまた視点が違ったりするので、もう一回やり直すのだけど、これはかなり負担です。みんなに負担。当事者にとっても。

最後に、私そう言いながらも、「介護支援専門員よりも全然相談支援専門員大好きだし、私そのためにこの数年エネルギーを注いでいるからさ」と言いながら、「でも、言葉ないわよね」と言った後で、介護支援専門員には、「でも、あなたたち年数かけてやってるじゃない。相談支援専門員は遅れてやってきた専門職で、これからだし、全然ベースも違うじゃない。だから、追いつくから待ってなさい」と言ったのですが、それにしてもは貧相だった、送る側が。

受け取る側は待っているけど、ボールを投げる以前の問題で、ミットまで行かないみたいな話で、ぼろっと落ちていて、拾いにいかなきゃいけないけど、拾う暇ない、あっちも。だから、結局そこでボールは落ち、その犠牲になるのは当事者なわけです。いろいろ勉強させてもらったのですが、なので戻すと、先を見通すということは、自分が一生その人を支援するわけじゃないので、ちゃんと託す準備ができることが大事だろう、これが先見性と移行期におけるつながる支援です。

それともうひとつは横です。今は縦の話をしたのですが、横ですね。横は俯瞰性といいますけど、全体を見渡す。目の前にいるのはその人だけですが、その人には家族がいたり、友達がいたり、近所の行きつけの店があったり、はたまた専門職がいたり、その広がりのことです。

そう考えたときに、全体を見渡す力を持って、関係者が協働して支援をきちんとつくっていくことが重要だと。これは言葉で言うと簡単だけど、さっきのようなことをしなきゃだめですよ。どうやったら手がつながるのか。手をつないで仲良くらんらんらんとすると連携できたと言うのかと学生に言ったら、うーんとか言って、連携とか仲良くなったというのは何をもって言うのかって、一生懸命それもディスカッションするのですが、このことをするのが、専門員だけではなく、相談支援従事者の仕事なのではないかなというふうに思っているわけです。

そのときに大事なものは、皆さん、真ん中に立ってくださいと言いましたけど、真ん中には、ご本人と、ここでいえば専門員の人が多いので、専門員と一緒に同じ方向に向かって立っていてほしいということです。この広がりの中のどこかに皆さ

んが埋没してしまうのではなくて、ちゃんと本人の横に、私はその人を支援する人ですと。私は相談支援専門員ではないので、ちょっと離れたところで、でも私は後見人なので、その隣にいたいなと思っています。よく、後見人って何する人かわからないと言われるのですが、もう一人味方が増えたと思っていただきたいというふうに思っています。

それともう一つ申し上げたいのが、次の40ページの相談支援専門員ってどんな人か。こういうことが出てきてほしかったのですが、出なかったの、最後私が勝手に書いたのですが、相談支援専門員というのは、議論の中でいつも出たのが、スーパーマンなのか、スーパーマンはどこにいるという話です。これは基幹相談支援センターについても言えることです。皆さん、物すごい多大な期待したりしませんか。基幹相談支援センターができると、めっちゃ良いことが起こって、今までとんでもなかったことが全て解消する。そんなわけじゃないですか。だって、この中にいる人がやるのですよ。どこかからスーパーマンが降ってくるわけじゃない。皆さん笑っているけど、何かそういう期待ってないですか。つくると、あそこがやってくれるからとか。

都の協議会もそうですよ。変わったおしゃべりなやつが会長になった、あいつ何かやってくれるだろうと、ぼんぼこ言われるのだけど、そんなできない。だから、スーパーマンを目指すのではなくて、コーディネーターでしよう、ネットワークをつくる人でしよう。そこは確認したほうが良いと思うのです。ですから、さっき言ったように、個の支援と地域をつくるというのが両方やれないと、多分これからは苦しくなる。

櫻井さんはうちの卒業生でいらっしゃって、私は直接教えていないのですが、優秀な卒業生で、でも、「先生、90何件持ってるんだから大変ですよ」と言われたのだけど、もちろんそれはできる卒業生だから頑張るのよ。寄ってくるのよ。だって0件のところもあるかもしれない。店は開いているけど客は来ない。彼のところにお客が来るのだから、それは誇るべきことで、愚痴っている場合じゃないのだけど、それって地域で支援をしていかないと。

よく言うのだけど、ゼミをつくるときに、私なんか人気がないから、希望者が少ししかいないわけ。だけど、人気ある先生はどぼっとしているわけ。ただ、最終的な結果として、私のところが充実度

が高かったりすることもある。それは、人数が少ないから、一人一人をちゃんと見られるから。どんなに人気が高くていっぱい学生が集まっても、一人一人に掛けられる時間が短くなるでしょう。その話。だから、どんなに、俺頑張る、私頑張ると言っていっぱい抱えても、1件にはかなわないかもしれない。1件でも、やらない人はやらないからだめなのだけ。ということをお願いしたいわけです。

それで、基幹相談支援センターのことはあまり今回取り組めなくて、だけど申し上げておきたいのがさっきの事です。基幹相談支援センターはスーパーマンを配置する宇宙ステーションじゃありませんので、地に足の着いた議論をしていただきたいと思います。

それは何かというと、基幹相談支援センターがきちんと機能しているのは、全国的に見せていただいても、もともと地域に資源があったということですね。それをつくる素地があった。これは間違いないです。だから、ハレーすい星のように降ってくるものでもなく、スーパーマンもそれにくっついてくるわけではなく、地域で着々とつくっていくことが重要で、建物をつくったからそれに見合う機能を持たせるのか、機能があって、でも1カ所にあったほうが良いよねとなつてつくのか、それは結果の出方が全然違うのだらうなと思っています。

ちなみに、これの27年版に書かれている、今年の3月31日現在の都内の設置状況ですが、19が終わっています。43が未設置です。この状況なのです。だから、なくてもやらなくてはいけなし、あるからそこだけが突出して良い実践をしているかどうかというのは、検証しなければいけないというふうに思っています。

間もなく時間になります。残された課題と提案、これだけはぜひ申し上げておきたいと思います。これは、私がやらねばならなかったのにやれなかったことです。

最もやれなかったことは、協議会というのは課題を発見するだけではなく、解決するための道筋をつくらなければいけなかったのですが、大変申しわけないことに、それは、5年あったのと言われるかもしれませんが、できませんでした。私の力がないだけではなく、いろんな意味で壁は厚かったです。

それで、お願いしたいことの1つ目。これはお願いします。残された課題は、私が力不足でしたと

いうことを前提に。一つは、これはずっと任期中に申し上げていたことで、今日最後に申し上げようと思います。多分もう言う機会がないので。都協議会というのは、委員や事務局だけのものではありません。委員会だから、委員は決めなきゃならないから、都民全員というわけにいかないの、便宜上私ども一部の人間が担っています。けども、都協議会の活動ってものすごくつかみどころのないところがあって、それはなぜかという、各市区町村で取り組まれている日々の実践、そして地域の協議会の実践の集大成だからなのです。

なので、皆さんがおやりになっていることを伝えていただかないと、都の協議会は何もできないし、また逆に言えば、都の協議会がどれだけ皆さんのところに出かけられるかということだというふうに思っています。ですから、このことは次期の会長さんにもきちんと引き継ぎをして、どれだけやりとりができるかということにかけていただきたいというふうに思っています。

それと、先ほど地域診断というふうに申し上げました。地域診断と言うと格好いいですけど、あのワークシートを使ってみてください。使いにくかったら作り直してもらって、次の人たちに「これちょっとだめだわ」と言ってあげてください。私のところでも結構です。私はこれを続けようと思っているので。

人材育成のときには、必ず人材育成ビジョンというのをつくらなければだめです。そのビジョンというのはつくるのだけど、さっき齋藤さんかな、誰がやるの、私たちだよねと書いていたと思うんですけど、その「私たちだよね」というのに皆さんに立ち返っていただきたいです。

人材育成ビジョンを例えば都の協議会がつくったり、例えば国がつくったり、もちろん指標だからつくっても良いのだけど、最後は皆さんが、自分たちの地域や目の前にいる利用者の方に役に立つ人材であるために、どんな人にならなければいけないのかというのを自分たちで決めていただくしかないと思うのです。ちょっと言い方によっては責任放棄に聞こえるかもしれないけど、そういうことなのだと思うのです。

なので、ワークシートをつくっていく過程の中で、当事者委員を中心としてその声を大事に聞いて、それに応えるための方策をみんなで模索する。そのときに一番大事なのは、「立場の違いを超えて共通言語を生み出していく」と書きましたが、さっきのあれです。エンパワーメント、ネットワ

ークって何って、それをみんながわかるように議論していくということが重要だと思います。

委員の参画については先ほど申しあげました。

4番の事務局への期待。これは書いてくれるな、言ってくれるなと私は言われましたが、もう最後なのでいいかなと思って申しあげます。先ほど櫻井さんが、自分たちの相談の部会だったり、事業所の部会だったり、その中で生まれたものはちゃんと計画に反映させていかなければならないとおっしゃっていました。私ども都の協議会の役割というのは実はそれなのですね。だけど、途中でも申しあげましたように、私のできなかったことはこれです。

都の計画については、推進協というのが別にある、そこで議論がされます。私よほど信頼されていないのか、使えないと思われたのか、そこに招聘されて話をすることもありませんでしたし、その委員に加えさせていただくこともありませんでした。でも、これは実はおかしなことだと思っています。

かわりに協議会の事務局をしていただいている心障センターの職員の方が図1を出して下さったりするのですが、別にまな板の上に乗るわけではなく、「これ、参考資料です」と置かれるだけです。

私たち協議会がなぜこの面倒くさい煩雑なことをしているのかというと、それをきちんと政策に反映していただいて、結果、一人一人の当事者の生活がよくなるということを目指したいからです。だけど、そのルートをつくることができませんでした。これは本当に申しわけないことだと思っています。

ですから、政策への反映と必要な予算、人材の確保というのは、私たち直接できるのだったらしたいです。でも、できないのだから、それをどうルートをつけていくのかというのは今後の課題だと思います。

最後のページです。41。先ほど言いましたように、育成指針（ビジョン）というのと育成体制は、人材育成をするときに必要なのですが、今、都では、これもいっぱいいろいろながあるけど、つながってないなと思うのですが、相談支援従事者初任者・現任者研修検討会というのがおありだそうです。そこでいろいろな議論をして、人材育成指針をお出しになっているのです。

そういう委員会があるので、任せちゃえばいいかということ、そこに出ている人がどれだけいろい

ろな協議会で話されたことを吸い上げるルートを持っているかということとは一方であるわけですね。できていないと言っているのではなくて、立派なビジョンができています。だけど、それを皆さんがどれだけ知っていらっしゃいますか。そう考えたときに、やっとうやっとう皆さんとお話をしたり、あるいは何かをお出しするという機会に恵まれるようになりまして、お預けいただいたり、あるいは一緒にやったりすれば、きつともつとつながると思うのですね。だからそこを、相談支援の従事者になろうと思っていない人にもどれだけ伝えられるかということが重要なので、そういったことも含めて、いま一度そのあたりは考えていただきたいというふうに思っています。

相談支援専門員協会を組織化したらいかがですかというのはずっと思っていることです。私は、全国の相談支援専門員協会の方ともおつき合いが大分深くなって、「東京はないのね」と言われます。つくればいいわけではありません。だけど、同じことを苦しみ、でも、結果を出して分かち合いということができるといえるのは、やっぱり一つ会があるということは重要なことだと思っています。

最後になります。私、このお役を引き受けると言ったときに、いろいろな研究者や実践者から、ご愁傷さまみたいなことを言われたのですね。意味はわかりますか。最後だから言わせてください。大変なだけであまりいいことがなくと。だけど、私、いっぱい良いことがありました。だけど、できなかったことも多くて、一番思うことは、課題とか問題ばかりを見過ぎですね、私たち。病気で。それは私も含めてです。

利用者のストレングスを見つけるのが私たちの仕事のはずです。エンパワーメントといいます。やっぱり言葉だけですね。私、皆さんに聞きたいです。東京都の強みって何ですか。それを見つけることから次期は始めていただきたいというふうに思っています。私はそれができませんでした。

問題だ、課題だというのばかり出て、こういう席に来て、あるいは皆さんから感想をいただいても、そういうことが非常に多い。実際、事実もあります。もちろんそうです。だけど、それを塗りかえていけるのも都の強みやよさがあるからだと思っているので、そのあたりはもう一回改めて皆さんと考えていけたらと。

私はこの役割は終わりますけども、都民の一人として協議会に期待をしますし、どこかの地で活動と一緒にできる方がおられるのだったら、ぜひ

続けたいというふうに思っています。

大変早口で、手話通訳の人に「腱鞘炎になるからね」と言っておいたら、「わかりました」と言われたので、許していただきます。皆さんも、本当にお聞き苦しい話で申しわけありませんでした。

ご清聴ありがとうございました。

(拍手)